

(FAX送信：全3枚)

農研生環第2167号
平成16年3月8日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

果菜類の灰色かび病薬剤耐性菌検定結果（技術情報第12号）について（送付）
このことについて、下記のとおり検定し、結果を取りまとめましたので送付します。防除指導の資料としてご活用下さい。

記

- 1 対象病害及び作物
灰色かび病 (*Botrytis cinerea*)・・・トマト、ナス、イチゴ
- 2 採集期間
平成15年1月～3月
- 3 検定方法（薬剤加用平板培地における菌糸生育度調査）
 - (1) 菌分離
葉及び果実病斑部より乳酸加用素寒天培地を用いて分離した。
 - (2) 検定薬剤、濃度

○トップジンM水和剤（チオファネートメチル水和剤）：ベンズイミダゾール系薬剤	100ppm
○スミレックス水和剤（プロシメトン水和剤）：ジカルボキシイミド系薬剤	20ppm
○パウミル水和剤（ジエトフェンカルブ水和剤）	100ppm
注）ベンズイミダゾール系薬剤と負の交差耐性を示す。	
○セイビアーフロアブル（フルジタキソール水和剤）	200ppm（実用濃度）
注）本年度より、実用濃度での感受性を調査するために追加した。	
 - (3) 培養温度及び時間
23℃、2日間
 - (4) 判定基準
検定培地上で菌糸の伸長が見られるものを耐性菌とした。

4 結果

表1 平成15年度灰色かび病薬剤耐性菌検定結果

作物名	採集場所	採集月	検定菌株数	トップジンM耐性		スレックス耐性		パウミル耐性		左のうちトップジンM,パウミル両剤耐性		セリアー非感受性	
				耐性菌数	同左率%	耐性菌数	同左率%	耐性菌数	同左率%	耐性菌数	同左率%	非感受性菌数	同左率%
トマト	横島町1	H15.1~2	5	5	100.0	0	0.0	1	20.0	1	20.0	0	0.0
	横島町2	H15.2	5	5	100.0	4	80.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	玉名市1	H15.3	7	6	85.7	1	14.3	1	14.3	0	0.0	0	0.0
	八代市1	H15.1~2	7	2	28.6	0	0.0	5	71.4	0	0.0	0	0.0
	八代市2	H15.2	6	6	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	八代市3	H15.2	7	7	100.0	1	14.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	計		37	31	83.8	6	16.2	7	18.9	1	2.7	0	0.0
ナス	熊本市1	H15.1~3	7	0	0.0	7	100.0	7	100.0	0	0.0	0	0.0
	熊本市2	H15.3	7	7	100.0	7	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	熊本市3	H15.3	5	5	100.0	5	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	横島町1	H15.3	3	0	0.0	0	0.0	3	100.0	0	0.0	0	0.0
	計		22	12	54.5	19	86.4	10	45.5	0	0.0	0	0.0
イチゴ	横島町1	H15.2	7	0	0.0	0	0.0	7	100.0	0	0.0	0	0.0
	横島町2	H15.3	7	0	0.0	0	0.0	7	100.0	0	0.0	0	0.0
	竜北町1	H15.2	7	3	42.9	0	0.0	4	57.1	0	0.0	0	0.0
	計		21	3	14.3	0	0.0	18	85.7	0	0.0	0	0.0

5 考察

- (1) トマトでは、ベンズイミダゾール系薬剤（トップジンM、ベンレート）に耐性を示す灰色かび病菌は、本年も83.8%と高く、同時にジエトフェンカルブ剤（パウミル）にも耐性を示す菌株も1ほ場で認められた。また、ジカルボキシイミド系薬剤（スレックス、ロブール）の耐性菌率は16.2%で、過去10年間で最も高くなった。
- (2) ナスでは、ベンズイミダゾール系薬剤（トップジンM、ベンレート）の耐性菌率は低くなったが、ジエトフェンカルブ剤（パウミル）の耐性菌率が高くなった。また、ジカルボキシイミド系薬剤（スレックス、ロブール）の耐性菌率は86.4%と過去10年間で最も高く、4ほ場中3ほ場は100.0%の耐性菌率であった。
- (3) イチゴでは、1998年よりジエトフェンカルブ剤（パウミル）に対して耐性菌率の増加が目立ってきており、本年も85.7%の菌株で耐性が認められた。ジカルボキシイミド系薬剤（スレックス、ロブール）の耐性菌は認められなかった。
- (4) フルジクソニル剤（セリアー）の200ppm（実用濃度）に対して感受性を示さない灰色かび病菌は、トマト、ナス及びイチゴのいずれにおいても認められず、すべて感受性であった。

6 対策

- (1) 灰色かび病防除において、トマトではベンズイミダゾール系薬剤、イチゴではジエトフェンカルブ剤の効果が劣るため、他系統の薬剤で防除する。
- (2) トマトやナスでのジカルボキシイミド系薬剤など、作物、薬剤によっては耐性菌の比率が増加傾向にあるので、特定の系統に偏った薬剤使用は控え、系統の異なる薬剤を組み合わせた防除体系を行い、薬剤耐性菌の発生を極力抑える。